
零崎道織の人間試練

高嶺透

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎道織の人間試験

【Nコード】

N3582T

【作者名】

高嶺透

【あらすじ】

一賊次期最強と揶揄されている零崎道織は行方不明の一賊現最強と呼ばれる男を捜していた

＊質問です

今更なのですが道織のパートナーを誰にするか困っています
今のところ最有力候補はヴィゼータなのですがどうでしょうか
それともオリジナルの方がいいでしょうか？
はたまた原作キャラか

いい案があれば感想欄に書いていってください。お願いします

人間でも良いのでお願いします

一世二代のプロログ（プロポーズ）

とある寂れた喫茶店の奥、そこには妙に綺麗な美男美女、いや美少年と美少女と百人いたら九十九人が答えるであろう二人がそこにいた

「その情報は確かなんですねえ」

少女の問いに答えたのは少年

「ああ、間違いない。」

「くっふふふ。ようやく見つけましたよお、ししよー」

舌ったらずな口調でうっとりしながら写真の男を見る少女

「……たく、いつまでたっても、ししよーししよーって、お熱だね道織は」

その少女と対極にため息混じりに話す少年

「くっふふふ。あなたにも感謝してますよう。流石玖渚機関《肆屍しかばね》
《現統括みちですう。しかし、未知くんも偉くなったものですねえ。昔
はこーんな小さなただの男の子だったくせにい。」

「変わらない人はいないさ」

「変わらない人もいますよお」

「それは屁理屈だよ」

「理屈じゃないですう」

またうんざりしたように少年——未知は両手をあげる

「悪かったよ。降参だ」

「くっふふふ。素直な子は私好きですよ」

「でも一番はそのししょーなんだろう？」

「当然ですう」

また道織はうつとりと写真を眺めだす

「ねえ道織」

「はいい？」

「君のことが大好きだ。世界の誰よりも君を愛してる。結婚を前提に付き合ってください」

一瞬

本当に一瞬きする間だけ、迷い答えた

「いやです。この身はししょーの所有物であり奴隷。あなたとは付き合えません」

「そっか」

「はい」

未知は胸元から一枚紙を取り出した

「困ったことがあればいつでも連絡してくれ。何とかしてやる」

それを聞いて道織はクスリと笑った

「ほんと、かつこよくなりましたねえ。ししよーに会わなかったら惚れてたかもしれません」

「今更そんなこと言うなや。……虚しくなる」

「くっふふふ、そうですねえ。ちよつと私が意地悪でしたあ」

そして道織は席からたった

「またねえ、未知」

「ああ、またな道織」

一世二代のプロログ（プロポーズ）（後書き）

やっちまいました

零崎斬識の人間崇拝を書き上げてから投稿しようと思ったのですが、衝動のまま書いてしまいましたOTL

まあやってしまったことは仕方がないので読者の皆様が楽しめるように今後もチマチマと書いていくつもりです
よろしく願います

第一試練パートナ―

「えっと何々、これにできればいいのかなあ？」

先程未知からもらった資料を確認する

聖魔杯

大会優勝者には聖魔王の称号、副賞として聖魔杯を与える。

武器の持ち込みは自由

勝負方法は問わず

優勝資格は勝ち続けること

参加資格は、人間と自律した意思を持つ人間以外のペアであること
――――

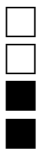
「人間以外の自律した意思を持つ者ってなんですかねえ……」

途方に暮れていた

またししょーは何をやっているのでしょうか

今思えばししょーは他の家賊の中でも少し変わっていたかもしれない。刀を磨いてはニヘラと笑い、メイドをみるところ構わずダイブするし、挙げ句のはてに、あの人類最強に求婚まで迫ってたりしてたなあ

「取り敢えずつてを当たってみるとしましょう」



ピアノバー――クラシッククラシック

関西圏を遠く離れた歓楽街、そこに乱立したビル群の中の一棟、その地下二階

そこに足を踏み入れる

綺麗に清掃されたフロア。テーブルの数は5つ。テーブルも椅子も床にボルトで固定されていた

わざと薄暗くされた照明

テーブルの向こう——一段高くなったステージには、高級そうな黒光りするグランドピアノが鎮座していた

五つのテーブルの内、一番奥の席に妙に手足の長い、針金細工のよな体格をしたスーツ姿の男、オールバックで銀縁眼鏡をかけた若い（ように見える）男がいる

「おにいちゃーん——ん!!」

満面の笑みでお兄ちゃん——零崎一賊長兄、マインドレンデル《自殺志願》零崎双識に駆け寄る道織

「おお!! 道織ちゃん久しぶりだねえ。ところで今日のパンツは何色だい?」

「くっふふふ白です☆」

「白かあ。うん、白は良いねえ。とてもいいよ。何がいいっていったら、浅はかかもしれないがやはり白と言えば清纯、まだ若い道織ちゃんにぴったりだ。というより、若い子は白以外のパンツを穿くべくではないと、常々僕は思っていたのだが、いやいや、勘違いしてもらっては困るから訂正させてもらうが僕は他の色のパンツが嫌いなわけでは無いんだ。むしろ好きだといっていい、それが女子中

学生のものなら尚更だ。色というものにはどうしてもイメージがつかまとう。否応にもね。それが肝でありまた核だよ。白のイメージは純真清楚。世の穢れを知らない純粋な天使たちにはぴったりとは思わないかい？道織ちゃん。まだまだパンツに関しては喋り足りないがあまり一方的に話すのは感じが悪いからまとめさせてもらうが、つまり他のどの色より白のパンツはヒエラルキーが断トツに高いということさ」

「はあ、お兄ちゃんそうは言いますけど私はその意見には賛同しかねます、確かに白の良さはわかります。事実現在進行形で久しぶりに会うお兄ちゃん達のために私は純白で決めてきているわけです。しかし、白オンリーというのはやはりつまらない、味気ない。白の良いところ、つまり魅力は何色にもなれるという点ではないでしょうか？どんな色にも染まるその儚さと強さ、白が変わるその瞬間、そこに強く惹かれるのではないのでしょうか？それはまさに可能性という名の花。それは、他の色にはない魅力ですが、ここで敢えて私は白の真逆、黒を押させてもらいます。その特徴は妖艶さ、大人の魅力です。何者にも染まらずただその人であり続けようとするその姿、そこに私は一人間、否、一殺人鬼として私は尊敬の念を抱かずにはいられません」

「くっ！残念だが、道織ちゃん君は僕の敵なのかい？」

「そうですね。私は敵ですよ？ただし、素敵という名のねッ！！」

どや顔

血の繋がりでなく、流血によって繋がる殺人鬼集団

とても仲のよい家賊。それが道織と双識の人間関係

「やあ二人とも遅れてすまなかったな」

折り目正しい燕尾服

ご丁寧に胸ポケットにはハンカチーフもセットしている
軽くウェーブのかかった肩までの黒髪。端正な顔立ちに、燕尾服は
この洒落た店の装飾に非常にマッチしている

「やあ、トキ久し振りになるのかな？」

「トキニイ、おひさー」

零崎でも珍しい草食主義者、《少女趣味》ポルトキープ《逃げの曲識》
義《アン様々な異名をもつ零崎曲識が店の奥から出てきた《草食主ベジタリ》

「……久し振りか。悪くない」

曲識は優しく微笑み奥のグランドピアノの前に座った

「一曲どうだ？」

「いいですねえ、聞きたいですう」

「トキの演奏なんていつ以来だったかな」

そしてまた曲識は笑う

「悪くない。作品No. 22——『ブランコ』」



「ふむ、それでここに呼び出したのはなんでだい？道織ちゃん？」

「まあ、お兄ちゃんそう慌てないでください。そう急かすと妹に嫌われますよう」

上目遣い十猫などで声でお兄ちゃんのご機嫌を取る。

正直、例えお兄ちゃんでもししょー以外の者にこんなことをするのは虫酸が走るがししょーに会うため、必要経費というやつだ

「だが、僕たちを呼び出したのは道織、お前だろう。わざわざ店を閉めたんだ。聞く権利くらい僕たちにある」

「ふう、だから急かさないでください。これだから《早漏の曲識》なんて呼ばれるんですう」

「断じてそんな不名誉な二つ名はない」

「またの名をお『早撃ちのトキ』」

「字面はかっこいいけど絶対意味が違う！」

零崎曲識のハイテンション突っ込み
レアである

「まったく、やはりお前は苦手だ。ペースを乱される」

ため息まじりに曲識は言う

「くっふふふ。お褒めお預かり光栄至極」

「そう言えば、アスのやつはどうしたんだい。呼んだのだろう？」

双識は気づいたように言う

「軋兄は用事があるから来れないそうです。くっふふふ。何をしてるんでしょねえ」

「それじゃあ、あんまり引っ張ってもしようがないし本題に入りましょうか」

「ししよーの行方がわかりました」

ずっとテーブルに未知から渡された資料をだす

それを見た二人、零崎双識、零崎曲識は意外にもその事実には驚きはしなかった

まるで最初から知っていたような

「へえー、こんなところにいたのか。あの子は」

「しかも、写真つきというのなら、確定だろうな」

あれ……もっと驚くと思ったんだけど……どひゃあああ!!とか、濃い顔で、な、なんだってー……ッ!!とかリアクションがあってもいいのに

「二人とも、ししよーの居場所を知ってたんですかあ？」

あの軋兄でさえ、わからなかったというのに

「いや、知らないよ。道織ちゃんも知っているだろう？あのアスでさえ見つけることが出来なかったんだ。僕たちなんかがわかるはずがないさ」

だが、と曲識が受け継ぐ

「この世界のほぼ全てを掴むことの出来るアスでさえ見つけられないという時点で、それは見つけたと同義だよ」

「……あ」

そういうことか

軋兄でさえ認知できない所なんて、元々存在するわけないのだから必ず、居場所は限定される

「大方予想通りだとはいえ、また厄介な所にいるねえ、彼は。らしいっちゃらしいけどさ」

「そうだな。よりにもよって第四世界とは……恐れ入るよ」

「……第四世界？」

「ああ、そういえば道織ちゃんにはまだ教えてなかったねえ。んー何て言おうか、この世界はね、四つに分断されているんだ。道織ちゃん。第一世界第二世界第三世界第四世界とね。第一世界は言わずと知れた一般人の世界だ。比較的平穏だね。第二世界は僕たちのいる暴力の世界さ。九渚機関や殺し名呪い名なんかもそこに入るね。そして第三世界ここは魔物や魔人、道織ちゃんは知ってるかな？神殿協会というものがあるんだけど。第三世界はそういった人外の

世界だ。あんまり関わり合いにはなりたくないけどね。」

「魔物、魔人？」

えっと、もしかしてRPGとかに出てくるあれ？

「ま、それに関しては説明は不要だろ？文字通りの意味だ。そういうやつらがこの世界には存在してるのさ」

いや、にわかには信じられないけれど

「じゃあ第四世界ってえ」「第四世界はね。道織ちゃん。神様って信じてるかい？」

「信じてません」

「ははっ、まあ今時の若い子には珍しくないんだろうけど、でもね道織ちゃん神はねいるんだよ」

あれ、なんか危ない宗教の臭いが

「警戒しないでよ寂しいな。いくら道織ちゃんがそんな態度をとってもね、神はねいるのさ。第四世界っていうのはそういう世界さ。」

「数年前、亡くなったはずの人が何人も蘇った事件を覚えてるかな？」

「もちろん覚えてるですよお」

世界中で死んだ人が一斉に生き返ったんだ。忘れるなど出来るものか

「あのあと、妙な噂が流れたんだけどね、実はあれを引き起こしたのは一人の少女らしくてね、世界を手に入れた記念にあんなことをしたらいいんだ」

「馬鹿にするのもいい加減にしてくださいですう。一人の少女にそんな力があるはず……」

「それが出来るから第四世界なのさ。第一一人の少女にそんな力があるはずない何て言おうとしたなら、君のその右目はなんなんだい？」

「――ッ!!」

確かに私の右目には“そういう”能力があるけれど、死んだ人間を復活させるなんて

あまりに

あまりに荒唐無稽すぎる

「でも、道織ちゃんが彼に会いに行くことは出来ないよ」

「何故ですかあ？」

曲識が無言で聖魔杯に関する資料をだす

「出場資格は人間と自立した意思を持つ人間以外のもの。君に魔人や魔物の知り合いはいるかい？言葉さえわかれば犬や猫でもいいのだろうけど、ちなみに僕にはいない。みたことはあるけどね」



途方に暮れて町をさまよっていた
双識の言うよう私に人外の友達はいない
しかも、探す宛もない。完全にチェックメイトだった

どうしよう

そして悩みながら歩くこと数分

（な、何ですかあああれえ!?!）

見つけたのは一人の男
黒というより灰色のように少し色の抜けた髪に、灰色のパーカー、
青のジーンズを履いた一人の青年

これだけ聞いたならいかにも普通の青年なのだがそいつはあまりにも普通とはかけはなれていた

まず目つき

その切れ長い、まるで特A級スナイパーのような鋭い眼光
あんな目つきをしたやつ、暴力の世界にもいなかった

確実に100以上は殺している

そして何よりも特筆するべきがそのオーラ
実際に漫画のようにまよってゐるわけではないが、零崎である私はそ
ういうのに敏感だからだろうか、感じる。黒い、とてつもなく黒い
プレッシャーを

そういえば双兄があのと

『こちら側の世界に人間として隠れ住んでる魔人もいるらしいよ』

と言っていた

間違いない

あれが魔人だ

そして私は駆け出し言った

「あなたあ、私のパートナーになりなさい！！」

□□■

(……貯蓄が尽きた)

川村ヒデオ二十歳。

高校卒業後就職のために上京するも面接を申し込んだ34社全てに書類段階で不合格

以来、いわゆる引きこもりに冒され外出を極力控えるようになった
実家に適当なことをいい、仕送りしてもらおう家賃と米だけで過ごしていた

だが先日、就職してないことがばれてその仕送りも止められてしまう
すでに、貯蓄はそこはつき、三年目の春のことだった

(……もう、死のうか)

売れるものは全て売った

だが、それでも人一人人生かす金額も作れなかった

(もうどうでもいいか)

すでに思考さえもまともにヒデオは働かせることが出来なくなっており、その帰り道のことだった

「あなたあ、私のパートナーになりなさい!!」

突然だった

急に目の前に現れた美少女に告白された

（ふふ……ふはははは。ついに、こんな幻覚まで見るようになってしまったか）

思えばこれまでの人生、この目つきの悪い目のせいでいわれのない文句をつけられてきた、女の子も寄り付かなかった

（最後に幻覚でも夢に浸るのも悪くない）

「もちろん、いいだろう」

「ほんとお！やったですう!!」

返事をする目目の前の少女は満面の笑顔になる

（ふふ……これが僕の生み出した幻想か）

もはや、どうでもいい

最後に女の子の笑顔もみれて僕は満足だ

そしてヒデオがそこから立ち去ろうとしたとき

「やっぱりい、その目つき人間じゃあないなと思ってたんですう。

あなたは魔人ですかあ。それとも妖怪かなんですかあ？」

その言葉が勘にさわる

ヒデオは今までその目つきに翻弄されてきた

ならばこれが自分の作り出した妄想なら、そんなことは言わないはずではこれは？

（幻覚ではない……？）

（いや、大事なものはそんなことではなく）

彼女は言った

『その目つき人間じゃあないなと思ってたんですう。』

今まで何度も誤解されてきた

殺し屋だとか、ヤ○ザとか本当に色々言われてきたが、

（最早、人間扱いすらしてもらえないのか）

そう、思うと胸の裡から負の想いが込み上げてきた

（……………ッ！）

この男やはりただ者ではない
その黒いプレッシャーが突然増大した
なんという迫力

私を相手にここまでのメンチを切るなんて

「君は……人からどんな目で見られているか、知っているか？」

「へ？」

急に何を

「そのゴスロリはなんだ？ アニメのキャラか？ 何かは知らんがそんなもの着て歩くなど恥ずかしくはないのか？ 正直君は痛い奴だ」

「……ッ／＼なあ、べ別に私があ何着てたってえじゆうでしょお！」

大体この服はししょーが可愛いって言うてくれたから着てるのであって別に私の趣味では

「ふっ……それになんだそのしゃべり方は、痛いを通り越して最早見てられないな」

「う、うるさい、うるさい。急になんだってのよお！」

（一体なんなんだこいつ）

「想像してみろ。例えば君の友人が、君のことを、お前痛いやつだな（笑）」と嘲笑してるぞ」

「いやあ！未知はそんなこと言わない」

「君のご家族は、いつになったら大人になるんだお前はと心の中ではお前を毛嫌いしている」

「嘘、嘘よ。おにちゃんやトキニイが？」

そんな事実は全くなく出鱈目なのだがその真っ直ぐ見つめてくる目を前にすると、何故か否定できなかった

そして言葉の刃は道織の心を折ろうと襲いかかる

「そんな風に思われてる君を見て、君の思い人は思うのだ、あいつに近づかないようにしよう」

「え？」

ししょーが？私のことを

「そ、そんなわけ」

「ある。」

ヒデオはその目をそらさない

本来ないはずの、答えを無理矢理、はてはめるために

「いや、いやいやいやいやあああああああ！！！」

いつの間にか道織は走り出していた

ししょーのことも未知のことも家賊のことも忘れ走り去っていった

ヒデオの顔はどこかすつきりしたように見えた

後にこの男とは再会し共闘する運命にあるのだが道織はそれをまだ知らない

第一試練失敗――第一試練継続

第一試練パートナー（後書き）

魔眼王閣下の話でした

感想などあったらよろしくです

第閑話———と言うかアンケート

伊織「諸君よく集まってくれた、ではこれから伊織魔殺商会入社試験を行っ……」

パタタタタンッ

伊織「アサルトライフルを人に向けて撃つなど、学校で習わなかったのか、貴様は」

謎の少女リリー「ご主人様悪ふざけはよした方がいいですよ？」

カチャ

伊織「俺が悪かった。取り敢えずその物騒なものを下に下ろすのだ」

リリー「わかればいいんです」

伊織「では気を取り直してだが、まずは諸君この小説を見てくれてありがとう。感謝してやる」

リップルラップル「感謝するなら、金をくれなの。世の中世知辛い」

伊織「君は突然現れるな。話の展開についていけないだろう。ただでさえ、この小説を読んでいる奴等には、林トモアキファン以外にも西尾ファンも被っていて片方しかわからんやつもいると言うのに」

リップル「わからないなら、人間崇拜の方を見てみれば良いことなの。それか、お・り・が・みを全巻今すぐ書店に買いにいくの」

伊織「宣伝はそこら辺にしておけ。第一あちらもまだ未完だと言うのにこの作者は何を考えているのだ」

リップル「作者も大変なの、両親の離婚とか……事情があるの」

リリー「いや、そんな悲惨な過去作者にはないから」

伊織「そんなどうでもいいことはさておき、この小説を見たものは知っているだろうが、聖魔杯に出場するためにはパートナーが必要だ、だがパートナーが中々決まらないので諸君たちに、アンケートを取りたい」

リップル「優柔不断なの」

リリー「一応パートナーはカッ……ヴィゼータで続きを書いてはいるんだけど、中々上手くいかないかもしれないから、画面の前の君にアンケートをとらせて貰うね……あ！パートナーは人間でもいいから戯言ファンも大丈夫だよ」

リップル「意見は感想欄に頼むの」

リリー「最後に、いつもこの小説を読んでいただきありがとうございます」

伊織「…………元ヒロインよりボソツ」パタタタタンッ！！

元主人公「チィース、社長このバズーカなんだけ…………うおっ！、社長が血塗れに！！いったい何が！？」

リップル「どしどし意見を待ってるの」

第閑話—————伝達成功—————了

第一試練パートナー（2）（前書き）

人間崇拝を見てる人
ネタバレ注意です

第一試練パートナー（2）

東京都郊外某所、そこに九渚機関《肆屍》の総本部があった。周囲は木々に囲まれ、至るところに赤外線センサーが設置され、温度センサーに加え、振動センサー。その他もろもろのギミックがところせましと作用しネズミ一匹通る隙間などない

だが、その建物に侵入を試みている強者がいた

「未知いいいい！！」

「なっ！貴様何者だ」

「馬鹿野郎！四宮さんのお知り合いだ————道織さんお久し振ります。今日はどのようなご用件でございま———？」

ドカバコゴス

「どけえええええええ！！」

侵入というより突入に近い
建造物内に一步踏み入れた瞬間、緊急事態時の警報が作動する

「くおらああああ！未知い出てこい！誰の服装が痛いだってえ？もっぺん言ってみろお！？」

道織はヒデオに完膚なきまでに叩きのめされ、混乱し多少事実を誤認してしまっていた



時間は少し前に遡る

九渚機関《肆屍》本部第一研究所内部、広くて丸いその空間は360度コンピューター群に囲まれている

まるで近代SF小説を実写化したかのようなそんな有り様だったコンピューターの前で《肆屍》の所員たちが黙々と手を動かしているなかのんきにチェスをうっている二人の少年と少女がいた

「それで、もう一度お聞きしますが、一体なんのご用でお見えになられたのですか？九渚友様？」

未知はポーンを一つ前に進める

「だからあ、暇潰しだってばあミツチャン」

「以前にも申し上げましたが、その呼称で呼ぶのは止めていただけないでしょうか」

「やだ」

九渚はクイーンを一つ後ろへ

「……………なかなか、やりますね。」

ナイトを後ろへ下げる

「うにー、ミツチャンは優秀だけどつめが甘いんだよね」

ルークを前に

「チェックメイトだよ。」

盤面を見直す

「まだ、チェックすらかかって無いのですが」

どう見てもキングをとられるようには見えない

「うにーミツチャンはもう少し先読みに長けてないと駄目だね。この盤面じゃどう、動いても36手以内には詰みだよ」

とは言われてもそれを確かめるすべは僕にはないが、この人がそうおっしゃるのならそうなのだろう。

いつも通りのこととはいえこの人には敵わない

どうしてこう、僕の周りは凄まじい女性しかいないのだろうか

「降参です。」

「うにーミツチャン何かとトラブルに見舞われるから、会いに行けば、面白いことが起こると思ったのに期待外れだよ」

あなたが来たことが既にトラブルなんですけどね。とは言わない
九渚友——名字から察することが出来るように彼女はこの《肆屍
》を統率する九渚機関そのトップ九渚直の妹である
つまり、VIPなのだ

九渚直はこの妹九渚友を溺愛してるため下手に手をうつと首が飛び
かねないのだ。比喩的な意味でなく、物理的に首が宙に飛んでしまう

——お陰でスタッフ達が生き生きと仕事が出来ていない

「あーもう、ぐっちゃん帰るよ。」

「はい。暴君」

「今日のミツチャン、つまらないよ。何か嫌なことでもあったんでしょ」

どうしてこうこの人は勘がいいのか。いや、この一族は、かな
実はさっき女に振られたばかりとは言いにくい

九渚が指示すると、全身ブランド物のスーツで固められた男が素直
に頷き、九渚を車椅子にのせそのまま退出した

そしてその十分後九渚の予感は的中することとなる



「――疲れた」

脇に備え付けられているソファ―に深々と未知は腰掛けた

「お疲れ様でした主任」

すると、一人の女性がコーヒ―を渡し声をかけてきた

「ああ、有難うございます阪井さん」

「いえ、いつもご苦勞様です。」

阪井さんは第一研究所の副主任で中々気の聞く人だった。いや、聞かない人ならこの地位にはいないか。

「相変わらず、凄まじい人でしたね」

「全くだ。いつもの10倍は疲れましたよ。有給でもとって温泉にでも行きたいです」

未知がそういうと、キランと阪井さんはその目を輝かせた

「あああ、あのですね。実は私実家が温泉を經營しておりますて、良ければご一緒に……／＼／＼」

顔を赤らめながら阪井実里が喋るが突如

ウーウーウー！！
警報器がなる

「一体何事だ！」未知の罵声が飛ぶ
「わかりません。恐らく侵入者と思われます。今、モニターを出します」「何で、いつもこんなタイミングで……」

ちっ九渚様の予感が当たってしまうとは
それにしても、いったい何者だ？九渚機関に喧嘩を売るなんて、とても正気の沙汰とは思えない

モニターが監視カメラに切り替わるそこには物凄い勢いで警備員を
薙ぎ倒している、女性の姿があった
というか、道織だった

未知はあまりの馬鹿さにこめかみを押さえた

「どういたしますか？」
女性の職員が未知に処置をあおぐ
どうしてくれようか

「あー、警備員を下がらせろ。あと緊急用のシャッターを開けろ。
知り合いだ、客としてもてなせ」



阪井さんがコーヒーを三つ運んでくる

「それで、弁解は？」
「あは、あははははは」

額に血管を浮かべ、今にも切れてしまいそうなのは未知
その向かい側のテーブルに座って、笑って誤魔化すのが道織

「つたく、勝手に勘違いして、勝手に暴れて、何だよ本当。」

「でも、久々に面白いものを見せてもらったよー」
道織の隣で喋るのは、九渚友

「あなたはお帰りになったのではなかったのですか？」
全く厄介なお人が残ってくれた

「うにー、帰る途中でちょうどこの子が突入してきたんだよ。あの
時は笑ったね。久々の大爆笑。道織ちゃん魔人のパートナーが欲し
いんだよね？」

「……はい」

「君のお願い叶えてあげるよ」



ここは、とある隔離空間都市
日本ではなく、というかとある大会のために地球とは別次元に作ら
れた場所だった
その某所に何坪か見た目ではわからぬほど大きな屋敷が一つ建って
いた

「こおおおらああああ!! また、部下に手え出しやがったなあ!!」
パタタタタタタッ!

一人のメイドがM16アサルトライフルをぶっぱなしていた

果てしなくシユールな光景だが、それを見ていた着物の女性が

「また、やつとるのか。毎度毎度お主たちも飽きないのお」

と喋るのを聞くとこの有り様は日常茶飯事らしい

とそこに銀髪に銀縁眼鏡の切れ長の目二十代くらいの青年が現れた

「おい。すずr」

「あ？」

「す、すまん。今はリリーだったな」

「うふふふ、わかればいいんですよご主人様」

声は笑ってはいるが顔はわらっていないかった

「はあ、君達はまだそんなことをやっているのか」

嘆息混じりに青年が言う

「向こうが悪いんです。私みたいな超絶美少女メイドを妻に持ちながら他の子に手を出すから……」

「超絶美少女メイド？」

パタタタタタタンッ！！

「おい、一応俺はただの人間ということを忘れるなよ」

ギリギリのところでメイドの銃撃をかわす

「貴様に九渚友とかいうやつから電話だ」

「友ちゃんから？」

「何でも、知り合いが聖魔杯に出るから魔人を一人貸して欲しいそ

うだ」

一瞬少女は思考し

「じゃあ、その役目はカッコにやらせてください。詳しい話はご主人様が皆に伝えてください。私は今から、メイドオタクを駆逐してくるので、後はお願ひします」

そして脱兎のごとく世界を手にした少女は邸内を駆けていった

ヴィゼータが道織と合流したのは数日後のことである

第一試練パートナー——了

第一試練パートナー(2) (後書き)

結局ヴィゼータになったという……

いや、エステイカドラグーンの人にしようかとも思ったんですが無理でしたOTL

まあ、これはこれでよしかなとも思うのでよろしくです

ではまた次回

第二試練聖魔杯

ヴィゼータが来たその日が最初の大会告知から、365日目。つまり、参加受付の締め切りにして、日付がかわれば大会開始というまさにその日であった

資料だと会場が奥多摩にあるらしいので、電車とバスを駆使して、どうにか奥多摩町に入る

そのあとはひたすら山をのぼっていた
路肩にはまだ残雪。

時刻は夜の9…00過ぎと言った所か

着ているのは制服にカーディガン

なぜ制服かというと別に趣味とかではなく、人識兄さんに頼んで戦闘用にカスタマイズされた、学生服で、いたるところに刃物を仕込んであるのだ

「にゃーん、つまり道織ちゃんはそのししょーを探しに大会に出るわけだ」「そ、だから無理に勝負はしなくていいんですう。大会はおまけみたいなもんですかねえ」

「にゃーん、愛って偉大だね」

「大抵の女の子はそれを信じて疑わないですからねえ」

絶対クラスに一人はいるよね、恋愛絶対主義みたいなやつ
まあ私は学校に通ったことなんてないけれど

そうして歩いているうちに『聖魔杯参加者受付』と、書いてある小さなログハウスを見つけた

「やっとなついたあ」

とヴィゼータは愚痴る

「ここにししよーが……」

やっと、本当にやっと

7年間ずっと探し続けた

そう思うと目頭が熱くなったが、道織はそれを拭う

否——まだ、足掛かりを見つけただけ

絶対に見つけ出す

そう決意をあらたし、いざログハウスの前まで行くと

何やら一組の男女が何やらバトツていたそしてそれを見ている二人の男女

喧嘩をしている片方は刀のように長い十手を持ち、ロングブーツを履いた若い婦警さん

もう片方は野戦服姿で、本物の刀を持った男だった

「会場内では知りませんが、ここはまだ東京都奥多摩市！れっきとした日本ですっ！逮捕！現行犯逮捕っ！」

その婦警の攻撃を青年は見事な刀さばきで打ち払った

「ふざけやがって！じゃあどうやって持ち込めってんだコラ！？」

がちんばちんと、プロのプレイヤーでもここまでの使い手は多くないだろう

「ねえ、ヴィゼータ。この大会って主にガチバトル系なの？」

「やれー、そこだあ！」

聞いている

まあ、入ればわかることか

さしあたって、中に入るために止めたいのだがいつそこで零崎を

……いや、ダメダメ。ししよーとの約束を破るわけにはいかない
なんて物騒なことを、考えていると、一人の女がログハウスから出
てきた。

かなり若い

腰まで届く美しい髪、涼やかな目元で引きずるように長ったらしい
外套を羽織っていた

そして道織が考えていたことを先に口に出した

「鬱陶しいわね……リユータ、殺してしまいなさい」

リユータと呼ばれた青年は不敵に笑う

「おいおい、エルシア……そういうわけにもいかんだろ。まあ見
てろ、こういう生意気な女は」

「じゃあ、私がやる」

エルシアと呼ばれた女はそのまま、腕を婦警の方へかざすとフワッ
と輝き始める

エルシアの目はすわっていた

（……本当に殺る気だ）

気配を察したリユータがぎょっと振り返る

「待てよエルシア！こんな所で魔法なんて……」

その時、道織の脳裏に浮かんだのは、ししよーとの約束だった
ししよーは優しい人だった。零崎のくせに無闇に人を殺さなかった。
そんなししよーは私を弟子にするさいに私に約束をさせた

ししよーの鉄の掟その1人を見殺しにするな

瞬間私は駆け出していた

目指すはエルシアと婦警を結ぶ直線上

（ッ！？）

同時

今まで共に戦いを傍観していた自分達以外の男女の男も走っていた

（邪魔ッ！！）

エルシア側に立ったのが道織、婦警側に立ったのがその青年だった

「死ね」

「隙ありッ！！」

どごす！！

ドォンッ！！

青年はリュータのかわりに十手の攻撃をくらい、道織には火球が当たった

土煙が舞う

「ウィル子のご主人様がっ！？」

と青年の連れは叫ぶ

「……エルシア。誰か、死んだ……んじゃないか？」

「そうみたい、一応ぎりぎり死なないくらいに手加減したつもりなんだけど」

さして興味の無さそうなりュータとエルシア

婦警にいたっては

「ほ……本官は殺してません。いいえむしろ、本官の正義の一撃を邪魔したので公務執行妨害です！！合法です」

合法では無いだろとリユータが内心突っ込む

そして土煙が晴れると

そこには、一人の少女が立っており、青年は倒れていた



（殺す気はなかったのだけれど……）

思わず、魔力を込めすぎてしまった

土煙が晴れば

そこには恐らく二つの焼死体が転がっているだろう

そう考えている内に煙が晴れる

立っていた

少女はエルシアの火球をくらい立っていた

「っ!？」

馬鹿な

彼女から魔力は感じない

ただの人間のはずだ

なのに、何故立ってられる？

「あつつうーっ！！熱いです。焼けてます。いやああああ！！」

何やら本人は暴れているが、逆に言えば暴れることが出来るほど堪えていなかった？

いや、きっと地面に当たったのだ、そうに違いない、でなければ生きてるわけが……ない



「あつつうーっ！！熱いです。焼けてます。いやああああ！！」

ごろごろ

ごろごろ——がんっ

「いっつううう！！」

転がって火を消してたら木の幹に頭をぶつけてしまった

「お、おい大丈夫か？」

リュータが道織を心配そうに声をかけた

「あ？」

「す、すまねえ」

地の声が出てしまった

警戒して一步リユータは下がる
どうでもいいけど

「あのー。マスター……生き、てますか……?」

マスターと呼ばれた、婦警に殴られた青年は目を覚ました
そして立ち上がった瞬間

ゾクッ

プレッシャー

青年からとてつもないプレッシャーがたちのぼる

(こ、こいつは)

感じたことがある。忘れるはずもない
この圧倒的な負のプレッシャー

(数日前の……!?)

「い……生きてた!? 良かった……じゃなくて、よくも本官の
邪魔を! 公務執行妨害で……」

青年の眼が光る

「冷たい手錠をかけるのですか」

あまりに低くぼそぼそとした声

そしてあの眼光が恐怖を掻き立てる

「う……て、手錠の冷たさを知ってるとは……まさか前科もの
!?!」

青年の睨みに婦警はたじろぐ

これだ。この眼光に先日の私もやられたのだ

青年は婦警に詰め寄り、両手を差し出した

「さあ。かけると、いいでしょう。……ただし」

「た、ただし？」

その気迫に押され一歩二歩と婦警は下がる

「僕が、その横暴を許すことは一生無いでしょう。ぼくは、ただ……」

一息

「喧嘩を止めたかっただけなのですから」

「うっ。綺麗事を言ってるけどこの目付き只者じゃない……絶対
に何人が殺してる……」

“——いや。何人ではなく、何十人でござるな。拙者が現役の頃に江戸城下で見た人斬りもここまでの目付きは——”
婦警の持っている長い十手が喋った

（なに……あれ）

武器が喋るだど？ いや、魔人や魔法があるのだ、喋る武器くらいいても当然——なのか？

凝然したのは道織だけではなく、ウィル子とリユータも同様だった
ようで、顔に出ている

だが、あの青年は全くの無表情である

まさか——見抜いていた？

（この男どれだけ力を隠しているというんだ）

実際はただ、感情が顔に出ないタイプなだけなのだが、ヒデオの眼光と雰囲気は道織に現実を誤認させていた

「なるほどな。パートナーが見当たらないと思えばそういう理由だったか」

「憑依武器ってやつかしら。初めて見たわ」

青年は相変わらず無表情

“ぬぬう。拙者の声を聞いても動じぬとは。美奈子殿、こやつ相当な修羅場を踏んでおりますぞ。なにを隠しておるやもわかりませぬし、ここは、一先ず……”

「そ、そうね岡丸。丸腰で手を差し出しているという誘いが怪しすぎるわ」美奈子というらしい婦警が、岡丸を腰のベルトに挿した変幻自在なのか、その時には普通の十手サイズである

「いいですかあなたたち！今回は本官がちょっとだけ落ち度を認めて見逃してあげますけど今度あったときはそうはいかないから覚えてなさい！！」

“拙者今回悪いのは美奈子殿だと思うのでござるが……美奈子殿は早とちりさえしなければ……”

「うるさいうるさい！十手のクセに！行くわよ！」

そそくさと美奈子は逃げるように洞窟の中に入っていた

穴があったら入りたいと言うけれど、初めて事例を垣間見た瞬間だった

(……とんでもない世界ですう)

まるっきり知らなかった

魔人、魔物

そんなものがごく当たり前に存在するなんて
今まで、暴力の世界で暴れてきて世界の全てを知ったかのように振
る舞ってきた

だが、それは間違い

人間は一人で地球上の全てを見ることは出来ないのだ
ならば——知らないことがあるのが当たり前

当たり前のことすら、わかっていなかった

反省

「よう、お二人さん助かったぜ。あの女いくら言っても聞かなくて
さ」

ヒデオと道織の肩を叩いてきたのは、リユータという青年だった。

黒髪で、屈託のない笑顔

後は胸のサバイバルナイフや腰のベルトの日本刀とピストル

これさえなければ完璧なのだが

まあ、私が人のことを言えた義理ではないけれど

さっきの婦警に、この傭兵のようなリユータ、魔法をぶっぱなすエ
ルシア

こと戦闘となれば中々厳しい戦いになるだろう

やはり、無闇な戦いは控えるべきか

「俺はリユータ、こっちはパートナーのエルシアだ」

「よろしく……とは言えども、無理ね。会場に入れば敵同士だか
ら」

「僕は。川村、ヒデオ。そして、ウィル子」

「一応よろしくお願いしておくのでーす。会場に入るまでは、敵ではありませんから」

ヒデオのパートナーは八十年代アイドルのような清純と勘違いが紙一重な衣装を着た美少女だった

「……………」

「お前は？」

私が思考して沈黙しているとリュータが爽やかにたずねてくる

「わたしですかぁ？ 私は零崎、零崎道織ですう」

途端、リュータの表情が変化する

「なっお前!？」

もしかして《零崎》を知っている？
ならまあ、仕方ないか。

「どうしましたかぁ」

飛びっきりの手作りスマイルで誤魔化してみる
我ながらあざとい

それを見ると、リュータは思い直したかのように

「…………いや、まさかな。悪い変なこと言っちゃまって」

「別にいいですよ。この大会を棄権してくれたら許します」

「許しちゃくれねえってか」

「……皆さん受付は」

ヒデオがログハウスを見やる

「ああ、そうだ、やべえやべえ。お前ら受付はまだだよな？一緒に済ませちまおうぜ」

□
□
■
■

中にはいると暖房が効いていて心底暖かい。

待ち合いのようなソファに観葉植物、ダルマストーブ。

受付のプレートが置かれたカウンターの向こうに、ぱりっとしたスーツに身を固めた可愛い女性が腰かけている

「リュータサリンジャー。人間だ。武器は……」

ピストル、日本刀、サバイバルナイフ、カウンターの上にとろせましと並べられる

それをこなれたようにささっと受付のお姉さんが帳簿をつけ端末に打ち込んでいく

「エルシア。魔人よ。武器はこれ」

彼女は年代物の広辞苑のように厚い本をどさとカウンターに置いた

どう使うんだろう？

「あなた、何か勘違いしてない？」

突然、エルシアがヒデオに話をふる

「いえ。別に」

するとウィル子が意地悪そうに

「にひひひ。マスター、この本で殴り殺せそうかと思ってましたね」

「……恐ろしい話だ」

エルシアは呆れ

「これは、魔導書。こんな大会に出るくらいなら知ってるでしょ？
無知を装って、心理戦でも仕掛けてるつもり？」

無知でした

少なくとも私だけは

「おい、ヒデオに道織いいぜ。お前たちの番だ」

道織とヒデオは並んで受付に立つ

すると、その側にリユータ達が立っていた

「……」

「淑女の真後ろに立つなんて気色悪いですよ」

「はは、気にすんな。こっちは武器を見られちゃってるからな。代
わりに、お前たちの武器も見せてもらおうってだけさ」

「その点さっきの女は愚かだわ。武器がパートナーというだけで、
虚をつかれるものも多いのに」

「もう俺たちには通用しない」

（この人たち）

道織は素直にすごいと思った

この大会は謎が多い

戦いが始まる前からこうやって、誰が、なにを所持し何を得意とするのか、顔も名前も知らない不特定多数と戦って天辺に立つにはいかに些細な情報と言えど持つべきだろう

「戦いはもう始まっているようです。マスター」

「あははー、ウィル子ちゃん。物騒なこと言わないようにしましうよう。私たちはあ、“まだ”敵ではないのですからあ」

先にヒデオが受付をする

「川村ヒデオ。と、いいます。」

「えっと、見たところヒデオさんが人間のようですね」
ウィル子は先程からずっと浮いている
そう考えて当然だろう

「ウィル子はウィル子なのですよー」

「はい、ウィル子さんですね。種族は？」

「にひひっウィルスなのでーす」

がたたっ！！

道織とヒデオ以外。真っ青な顔で壁一杯に逃げ出した

え？なにこれ？怖い……

「にひひひ。普通のリアクションはこんなもんです。道織さんだけですねーびびらないのは。とんだチキンです」

いや、ただ話についていけないだけなのだけど

「……ウィルスさんですか。受付でいろんな方がいましたけど。ウィルスというのは初めてですね……」

「それにしても……うまそうなPCなのですよージュルリ」

「はっ！？まさか」

「にひひ。侵入ですー」

好き放題だった

すると暴走を見かねたヒデオが

「今はこちらのノートパソコンに感染してるので大丈夫です」

ヒデオがパソコンを開くと、ウィル子がノートパソコンに入り画面にうつった

笑顔でピースをし、また、ヒデオの隣に戻ってくる

「あのおリユータさん。ウィルスは珍しいんですかあ？」

「なっ！？馬鹿、珍しいなんてもんじゃねえぞ。ウィルスなんて：
：：お前はどうかエルシア？」

「見たことはないわね。でもそれが現実」

道織から見れば魔法を使ったエルシアもいようなのだけれど、その彼女をもつてしてもウィル子は特殊の存在のようだった

「では、ヒデオさん武器の方は提示なされますか？」

「提示とは？」

「参加者の提示された武器はデータベースで管理され以降使用者の名前と一緒に全参加者が確認できるようになります。とはいっても強制ではありません。隠すことで有利になるような武器なら、不利でしょうし、持ち込み自体自由ですから。ですが、武器を提示されれば、特典として、チケット——要は会場内で使えるお金ですね。会場内ではお買い物ができますが、主催者側で用意したチケットでしか、品物は購入できません」

(なるほど)

つまり、ここで武器を提示して資金を集め、会場内でその資金を使い新たな武器にするのも可能と言うわけだ

「強いて言うならば」

ヒデオは含みを持たせて私たちの目を引き言った

「こことか」

ノートパソコンの隅っこを指差す

「もしかしてえ、角ですかあ？」

「叩けば、かなり痛」

ばしっ!!

ウィル子が生デオの頭をチョップする

「パソコンは精密機械です。間違っても殴るものではありません！」

「だが……他には何もない」

ばしっ!!ばしっ!!

「おい、生デオ……」 啞然として寄ってきたのはリユータ

「隠し事はなしだぜって言いたいマジなのか？」

「まあ……そう」

すると道織は

「だったら拳とか、肉体的な攻撃が得意なら武器として認可されるんじゃないですかあ？」

「おお、そいつは名案だぜ道織。どうなんだ？生デオ？」

「……ではそれでよろしいですか？」

「もちろん大丈夫です。手足が武器の方は結構いらっしやいます。」

そして、私の登録の番が回ってくる

「ところでよお、道織お前のパートナーは？」

「え？」　「そういえば先程から声が聞こえない」

会ってまで数時間の付き合いだが、彼女は俗におしゃべりの方に属する人間だ

なのに何故……いない？

周りを見渡すと――いた

観葉植物の後ろにぶるぶると震えていた

それを見つけたエルシアがヴィゼータに近寄る

ヴィゼータ逃げる

エルシア追う

ヴィゼータ逃げる

エルシア追う

ヴィゼータ逃げる

エルシア追う

ヴィゼー……「525ページ」

エルシアが唱えると光の奔流がヴィゼータもろともログハウスの半分を飲み込む

「にゃあぁ~~~~っ!!」

爆風で高々と舞い上がったヴィゼータが地面に落ちる

「久しぶりね。ヴィゼータ。お兄様は元気かしら？」

「えっ……エルシオン様は、元気元気……今の私よりは。」

「そう」

「ヴィゼータとエルシアは知り合いだったんですかあ……?」

「ええ、まあね」

「知り合いだからって少し……やりすぎですう」

ログハウスを破壊されたラティはにょろーんと現実逃避を開始していた

「ログハウスを破壊してまで何をしたかったんだよお前は」
リユータが聞くと

「別に、お兄様のことが聞きたかっただけ」
それだけのために……こんな大掛かりな

「ヴィゼータ、大丈夫？」

「にょラティ慰めて」

ヴィゼータがラティに抱きつく

「二人も知り合いですかあ？」

「え？あ、はい。昔からヴィゼータとは、この前まで同じ職場で働いてたんですよ」

「ラティもゲームばかりやってないで、たまには一緒に遊ぼうよ」

「はいはい、とりあえず仕事を終えたらね」

ラティはヴィゼータをあしらう

「えっと、では零崎道織さん。人間でよろしいですね。ヴィゼータが魔人……と。武器の方は如何程で？」

「じゃあ、これで……」

「これは」

道織が取り出したのは糸

「武器……なんですか？」

「はい、何かと便利ですよお」

「なんだ、道織、おまえ曲絃糸使えんのか？」

「おお、よくわかりましたねえ」

裏の世界でも使う人はごくわずかだと言うのに
歳のわりにこいつ、修羅場を踏んでるな

「……曲絃糸とは？」

今まで会話に入れなかったヒデオが聞く

「なんだよ、ヒデオ知らねえのか。えっとな、簡単に言うのだ、糸
で色んなことがきんだ」

はしよりすぎだった

「分かりやすく説明するとですね、糸ってとても汎用性に長けた道具
なんですよ、縛ったり、よし登ったり、罠に使ったり。そのなか
でも特に残虐なのが切ることです」

「切る……とは」

「そのまんまですよお。自信の『力』なんて全く要らなくてですね
え。ん——となんて言いましょうかあ。世の中には色んな『力』
が溢れていますよねえ？ 摩擦力。圧力引力重力磁力。張力応力抵抗
力弾性力遠心力向心力。作用反作用、滑車の原理に振動原理。はね
返り係数と摩擦係数。——それらを応用することで人体をジグザ
グに切り刻むのです」

「……」

「安心してください。この技術を大会で使う予定はありませんから
あくまでも牽制ということで」

「では糸ということで」

実際にはこの服に数百もの刃物が仕込んであるのだが、まあいいか

「それにしても、曲絃糸たあ見かけによらねえな。可愛い顔して残

虐だぜ」

「くっふふふ、ナンパのつもりですかあ？」

「うるせえ」

「見かけによらないのはヒデオさんですう。どう見ても格闘家には見えないじゃないですかあ、なのに拳が武器って言うなら、その服の下は極限まで絞られてるんでしょうかあ」

「……まあそんなところです」

「だとしたら、その血に餓えた目付き納得できるぜ。しかもパートナーは電子ウィルスなんて、未知の存在だ。相当なやり手とみたぜ。ま、あとはお前のスタイルがボクシングか空手か、実際にやるまでのお楽しみだな」

「ヒデオさんは要注意ですう」

大会に積極的に参加する気はないが、最後辺りまで残ればししよーがこちらに気付くかもしれないし、空気を読んでおこう

「じゃあ、私は先に行かせてもらおうですう」

道織は会場へ歩き出す

「おう、またな」

爽やかな笑顔でリユータは手をふる

「……また」

爽やかとは言えないがヒデオも一言

「次は手加減なしの魔法をうってあげるわ」

エルシアも嫌みのない微笑を浮かべ見送る

「うはー決勝で会おうなのですよー」

ウィル子は無駄に元気がいい

「にゃーん。パートナーを置いていくなよー」

道織は会場の入り口を悠々とくぐるのだった

第二試練聖魔杯——參加決定——了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3582t/>

零崎道織の人間試練

2011年9月27日17時13分発行